

浮遊する言の葉たち

—— 太陽系からダイヤの国へ

水沼文三小説選集

目次

浮遊する言の葉たち……………3

―太陽系からダイヤの国へ―

文鳥、右肩に舞いおり、原稿見詰めたり……………117

―日根野連・夏目金之助の旅路―

ある東京物語……………161

浮遊する言の葉たち

—— 太陽系からダイヤの国へ

2123年のクリスマス・イブ、ここ東京郊外のある市街地にも大空にきらめく星がかぎりなく広がっていた。

中学一年生の大空真理奈は隣の同級生、大原夏美と望遠鏡入りのオレンジ色の大きなバッグを二人で抱かえ、近くの公園へ出かけた。後から真理奈の弟、小学五年生の文夫もついてきた。

ともに天文クラブ会員できれいにまたたいている星空の観察に余念がない。

ほんのりあたりを照らす街路灯の下にあるクリーム色ベンチに座った。

年末なのに小春日のような暖かさ。真理奈はエンジのえりをひろげ、内ポケットから小型カメラをとり出す。

「きれいな眺め」3人は瞬く夜空の星空を見回している。

そのとき、公園の東端にあるプラタナスの林あたりが白白と光が広がった。100メートル上空から発光体のようなゴンドラが現れ、ゆるゆるおりて来て、近くの歩道にふわり舞い降りた。小さいドアがあき、12歳くらいのピンクのドレス姿の少女が一人現れた。街路灯のベンチに座っている3人の方に近づいてきた。右腕に白いレースのバッグをかかえていた。

「真理奈、文夫、夏美さんですね。私、ダイヤモンドの国から参りましたエリーナと申します。このバッグには取り出しても、取り出しても限らない、たくさんのダイヤモンドが納められています。……くめど尽きない水のようにでもあります。……それこそ魔法のようなバッグでもあります。この中の粒粒をどなたにもお分けください」そう述べて、真理奈に手渡した。

2

間もなく、少女エリーナは立ち去り、ふたたびゴンドラの中に消えた。……間もなく、オレンジ色の光を放ち、スピードをあげて大空へ舞い上がり、みるみる小さくなり、やがて見えなくなつた。

(こういうことがあるのかしら、これは現実なのか) 3人は見詰め合った。

3

バッグのチャックをあけた。白白とキラキラ光るダイヤモンドがぎつしり氷砂糖のように詰め

込められていた。月の光を浴びて絶え間なく輝いている。

真理奈は夏美からピンクのスカーフを受けとり、広げた。氷砂糖のようなダイヤモンドをつかみ、そこに並べた。

4

『時空を超えて——太陽系からダイヤの国へ』の物語が始まります。

5

2123年の大みそかの夜、天空にはキラキラ無数の星が広がっていた。真理奈、文夫は隣の夏美と自宅前のベンチに座ってこの前のクリスマススイブのように瞬く星の観察に余念がない。あれは南十字、あちらは北斗七星、てんびん座……と、望遠鏡で見詰めつづけていた。

……するとまたもや、黄金色の発光体が見るみる大きくなり、200メートル先の松林に落ちてきた。間もなく青、白、黄金色の緩やかな衣装をまとった12歳くらいの少女が現れ、真理奈

と夏美の方へ歩みよってきた。クリスマスの前夜の少女だった。真理奈と同じような年齢である。

「私、ダイヤの国の少女エリーナです。太陽系の外にある惑星からやって来ました。ダイヤの国のセンサーが動いて、地球の国のすみずみまで知ることができのです。いま、私はダイヤの国の言葉を使っています。それが自動ホンヤク器によって、日本の言葉に換えることができます。……みなさん、よく分かるでしょう。……さて、お話はかわりますが、あのクリスマス前日、あなたに魔法の大きな袋をお渡しました。そのダイヤモンドをできるだけ多くの子供たちに分け与えようとなりました。最近ダイヤの国が精巧で巨大なセンサーを駆使して地球上の鉱物資源を調べたところ、わずかに残っていたことを知りました。極めて少ないダイヤなのに、この魔法の宝石袋を残しては地球上の経済界には大きな支障を来たす——という判断に至りました。……したがって、魔法の宝石袋を回収に参りました。私たちの国にはダイヤモンドは無限にあり、建築資材などにも使っています。そこで、真理奈、夏美、文夫さんの3人を私たちの国へご案内しようと思います……皆さま、参りましょうか……」

かれんな少女エリーナはいつの間にか3人の名前を知っていた。

3人は家に帰り、父母、兄弟に事情を話すと、みんなびっくり、家の中から庭の方へ姿を現した。真理奈は保管していたダイヤの魔法の袋をエリーナに手渡した。夏美も真理奈から手渡され

たダイヤの袋を両手に支えて現れ、エリーナの宝石袋にしまった。

「ありがとうございます、これでほっとした。地球上ではこの地に採掘するダイヤだけ保有して活動すればよいのです。……それでは皆さま、しばらくの間、ダイヤの国の旅行を楽しみましょう。先ほど皆さまの父、母に連絡しましたところ、兄弟、姉妹ともに喜んでいました。……ご安心ください。……では参りましょうか」

3人は異次元の少女の柔らかい、静かな声にうっとりしました。そのうえ、3人をとらえて離さない、すてきな容姿だったのである。

「ダイヤの国まで、どのくらい時間がかかるの？」真理奈がたずねた。

「……すると、自動ホンヤク器を通して、すがすがしい異星人の女の子の声が響いてきた。

「わかりました。では、あの宇宙船のなかでお話しましょう。あの椅子に座れば実感できます」
3人は宇宙船のなかに入り込む。自動ドアが閉じられた。エリーナは少女とも見えない力で3人を輕輕と抱きかかえ、羽毛のようなものに包まれたボックスにすわらせた。かぐわしいにおいが漂っている。3人はうっとり眠気も催す。……間もなく眠ってしまう。宇宙船は金色の光を放って、飛び立つ。……いつの間にかあたりが見えなくなった。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」3人の耳元にエリーナの音量豊かで、快い声が響いてきた。

「いま、光エネルギーに包まれて、太陽系を抜けて、ダイヤモンドの国へ向かおうとしているのです」
エリーナは3人の両親あてにメールをうつ。

「皆さまにダイヤモンドの国のすみずみまで見学していただきます。地球時間で2カ月ほどで、到達しますから、ご心配なさらなくてください。……ダイヤモンドの国の宇宙船はその程度のスピードがあるのです」地球の宇宙船より1000倍の強度で作られているからだ。

「もえ上がる心配はない。安全速度であります」

3人の父母は自宅で受信内容を見て、そのままこのこもった文字にも安心した。

6

「さあ、出発」

エリーナが大きな声で話しかけた。3人はぱっちり目を覚ました。

エリーナは日本語をホンヤクできる小型の器具をポケットにおさめた。

「私たちの体は地球上の人人より、100倍という鋭いセンサーをもっています。遠いところで見たたり、聞いたり、においをキャッチできるので。言葉でも、地球の世界中の国国の言語

でもセンサーを通して、ダイヤの国のコトバが地球上の国国のコトバでホンヤクしたり、地球上の国国のコトバをダイヤの国語に転換できるのですよ。……だから皆さんは日本語として聞こえるのです。そして、地球人の出来事は心の中まですべて分かるのです。私たちは透視力の達人で、邪よしままな考えも見逃しません」

エリーナのさわやかな声が響く。

「いま、地球時間で、2時間過ぎました。ダイヤの国の宇宙船は地球号より100倍の速度で飛んでいます。……下をぐらくください」

3人はその方向を見詰め「うわすごい」

感歎の声をあげた。遠く、青い地球が闇の中にさえざえとポツかり浮んでいる。その周りを遠く近く、光瞬く地球からの宇宙船がかすかな青白い光を放ちながら、20、30隻浮んでいるように走っているのだ。

「素晴らしい眺めだ」